

平成24年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同利用型の研究成果報告書

坂中紀夫

研究科題名：自己記述的文芸形式（「自伝・日記」）のロシア的特性

日記や自伝といった自己記述的な資料は、その記述者の自己への関係の在り方を示したものである。また一般にこうした資料は、分布が社会層的に限定され、記述内容も帰属集団に応じて変化し、その継続性も実際には短期間であることが多いと指摘されている。従ってそれらは、特定の社会の「感性の歴史」の資料として役立ち得ると言うことができる。申請者はこうした観点から、ロシアにおける自己記述的な文芸形式の特性というものを主題化した。

以上のような問題設定には、現代的な意義も認めることが出来る。現代的な自己記述の手段として多く用いられるのがソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）であるが、こうしたメディアの利用は増加傾向にあり、現時点ではロシアに関しても、ロシア最大の SNS（ВКонтакте）が国別のサイト訪問数で第二位を記録するという統計も示されている（<http://www.alexa.com/topsites/countries/RU>）2013年3月15日閲覧）。もちろん、こうした現象は、情報環境がある程度、整備された社会に共通に指摘されることであるが、情報社会における感性というものを主題化した際に、日本的な文脈では「つながりの社会性」への志向が浮かび上がるように、ロシア的な文脈においても何らかの特徴が、自己を巡る伝統的な文芸形式である日記や自伝の研究を通して、指摘される可能性にもつながるのである。

スラブ研究センターにおける研究滞在では、北海道大学所蔵の図書資料から、日記や自伝に関連的な資料の渉猟を行った。ロシアにおいて日記や自伝を書くという営みが一般に見られるようになったのは18世紀以降のこととされているが、それらの数は膨大であり、18世紀からロシア革命までの間だけでも、数万点の目録があることが文献学的な調査から分かっている。そのため、今回の研究滞在では、まずロシアにおける自己記述的な文芸形式に関する先行研究の収集に努め、一定の理論化された分析枠組みの整理を試みた。それと同時に、フランスにおけるいわゆる「内的日記 *les journaux intimes*」との類似が、先行研究において指摘されているような個別の文献の調査も進めることが出来た。これらの資料の具体的な検討は、今後の課題であるが、それを通してロシアにおける内面性や親密性の特徴が指摘されることを目指したい。末筆ながら、センターおよび図書室のスタッフの皆様にご心よりお礼を申しあげたい。